

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ(二四)

第六八則 夾山揮劍

〔示衆〕

衆に示して云く、寰中^{かんちゅう}は天子^{てんし}の勅^{ちやく}、閭外^{かんがい}は將軍^{しゆん}の令^{れい}。ある時は門頭^{もんとう}にて力を得^え、ある時は室内^{しつない}にて尊^{そん}と称^{しょう}す。しばらくいえ、これ甚麼^{なんびと}人ぞ。

〔本則〕

挙す、僧^{そう}、夾山^{かつさん}に問う、塵^{ちり}を撥^{はら}つて仏を見る時はいかん。(何ぞ必^{ひつ}とせん。)山云く、直^{じき}にすべからく劍^{けん}を揮^{ふる}うべし。(果然^{はたして})。若し劍^{けん}を揮^{ふる}わすんば、漁父^{ぎよふ}、巢^すに棲^すまん。(坐^ざするときはすなわち仏にあらず。)僧^{そう}、挙^こして石霜^{せきそう}に問う、塵^{ちり}を撥^{はら}つて仏を見る時はいかん。(見るときはすなわち撥^{はら}わず、撥^{はら}うときはすなわち見^みず。)霜云く、渠^{かれ}に国土^{こくど}なし、いづれの処^{ところ}にか渠^{かれ}に逢^あわん。(坐^ざさるときはすなわち仏に逢^あわん。)僧^{そう}、かえつて夾山^{かつさん}に挙^こ似^じす。(往来^{わらい}、易^{やす}からず。)山^{さん}、上堂^{じやうだう}して云く、門庭^{もんてい}の設^{せつ}は老僧^{らうそう}にしからず、入理^{にり}の深談^{しんたん}はなお石霜^{せきそう}の百歩^{ひゃくぽ}に較^あれり。(各^{おの}おの一櫛^{いっしつ}を得^えたり。)

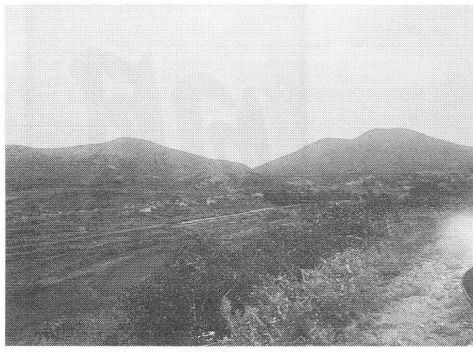
今回は夾山善会^{かつさんぜんね}(八〇五〇八八一)が中心のテーマですが、『従容録』ではこの方が中心の本則はこれ一つきり、まさに貴重な一則といえます。夾山は、禅を青原—石頭—薬山—船子—夾山と承けついで青原系統の人で、唐末の英傑のひとりであります。

夾山とは、善会が開いた禅道場のある山の名。湖南省常德市の北西九〇キロにあり、双峰が寺を夾むような形をしているところから、山の名がつけられました。西暦八七〇年に開かれた寺は、幾多の変遷を経て現在はミカン畑の中に三つばかりの堂宇が佇む夾山寺。でも、前面の田んぼを隔てて碧巖という名の巖が連なり、宋代に円悟さんがこの巖にちなんで『碧巖集』を夾山寺でつくり、禅門第一の書とされたことはよく知られています。

ちなみに、『従容録』六巻はこの『碧巖集』一〇巻をモデルとして、曹洞宗の万松行秀(一一六六—一二四六)が一二二三年につくった公案集です。万松は、宋代曹洞宗の巨匠、宏智正覚が禅の古則百をえらんで頌(詩のコメント)をつけた「頌古百則」をもとに、その一則ずつに対して(一)示衆、(二)本則への著語、(三)評唱、(四)頌古への著語、(五)評唱、というスタイルの書に仕上げました。(三)と(五)は長いのでふつうは略され、ここでは(四)も省い

夾山揮劍





夾山遠望

て(一)と(二)だけをとりあげています。

ついでながら、かの元の宰相耶律楚材から深い帰依を受け、その要請で『從容錄』を著したこと、万松の弟子の雪庭福裕が嵩山少林寺を復興し、北地曹洞宗の一大拠点となったこと、万松さんの墓塔の一つが現在北京市内の西単北大街沿いに建っていること、などを私たちは忘れてはなりません。

前置きが長くなりましたが、まず「示衆」を意識すると、「都の近くは天子の勅や將軍の令でよく治まり、事あらば門前に兵を集めて防護を固め、事なければ室内に坐って大尊貴じや。サア、こんなはた

らきのできる人はいったい誰かな」といったところでしょうか。寰中も閩外も畿内の意味。万松さんは、こんなすばらしい仏法のはたらきができる人こそ夾山や石霜なのだとほめたたえているのですね。そのはたらきを示しているのが「本則」です。

僧「ボンノウを除いて本来の仏に出会うとは、どういうことですか」夾山「出会ったら剣で截つてしまえ、そうせんと毒でお前さんのいのちが奪われるぞ」僧は石霜のところへ行つて同じ質問をした。すると石霜「イヤハヤ、仏さんはホームレスだから、どこへ行つても逢えやせんワイ」僧は夾山のもとに帰つてこれをつげる。夾山は本堂で説法をして「方便のはたらきはワシが上、奥深い道理は石霜が上」

おもしろいですね、禅の問答は。質問者の力量を見ぬいてズバリと切る切り口、従前のいきさつを知つて示す最も適切なことばの妙。中心テーマは見仏＝仏との出会いです。僧はボンノウをなくせば仏に出会えると思ひこんでいる。だからそんな質問に対して万松は「可必」、つまりよけいなことをする必要はないのに、とコメント。夾山は智剣をふるって見仏さえも截り

すててしまった。「漁父、巢に棲まん」とは、漁父という妄想に自分の家を奪われてしまふということ。ここを万松は、「だから仏の坐にすえてしまふと、もう仏ではなくなるよ」と実に厳しい。

僧は全然わからず、石霜のところへ行つた。この人は石霜慶諸(八〇七〜八八八)のことで、薬山・道吾・石霜と法を承け、やはり湖南省の石霜山で道場を開き、坐禅を重んじた禅哲です。僧が同じ問いをしたのに対する万松のコメントが、実にすばらしい。「真の見仏ならボンノウを除かんでもよい、除かなければならんボンノウがあるのなら、けつして見仏ではない」というのです。

ここには、ボンノウの塵と仏とは二つではない、云いかえれば、生死のしがらみの中にこそ仏があり仏に逢える道理が示されているのですね。また、石霜の語も深いですね。仏はホームレスだから、どこを探してもみつからない、外を探すのをやめて、本モノの自己を見出せばそれが仏じゃないか、という意味を含んでいるのです。だから万松は「作られないのが仏」と的確な表現で石霜を肯定した、夾山もまた石霜をほめたたえた、というわけです。

わたくしがむかし永平寺の衆寮で修行していた時のこと、洗濯場がいつも汚れているので、皆が使い終ったころをみはからつて毎日清掃につとめました。ところが一向にキレイにならず、すぐに元のモクアミ。かえつて気分がメイリよく指導をいただいていた単頭さんに打ち明けたところ、単頭さんから「ただ清掃していればいいじゃないか、その時君は仏さんなのに、なぜクサる必要があるのだ」と一喝され、心洗われました。忘れられぬ懐かしい思い出です。

その時ほど、無心で仕事に励むことも坐禅と同じなんだという実感を抱いたことはありません。どんなにキレイにしても汚れる、それは当り前のこと。それを「またよごされた」と思つてメイリる心はボンノウのとりこ。逆に「またキレイにできるぞ」と励めば仏さま。行為は同じでも心は天地懸隔です。ボンノウがあるままで私をなくせば、もう仏のいのちとしてののはたらきです。掃除でも坐禅でも。「この生死は仏の御いのち」とはまさにその辺りの消息。夾山も石霜も万松も、みなボンノウと仏を二つとみてはならぬと教えているのはそのため。煩惱即菩提の世界なのです。

第一五回成道会、円成す



一月七日、参禅会による一五回目の成道会が厳肅にとり行われました。

釈尊の成道（お悟り）により仏教は誕生し、仏教徒としてこのご恩に報いる行が成道会です。二柱の坐禅の後、椎名老師より法話をいただきました。

釈尊の遺言「怠ることなく実践し、自分自身の修行を完成させよ」、その報恩には正しい坐禅が最高です。自分の成道会を自分ができることは有難いこと、とお話されました。

昼食は高野さん、佐野さんの手作りでした。又、会の関係者から、お菓子や果物が出席者に供養され、ご老師からは、永平寺カレンダーを頂戴いたしました。

歳末助け合い運動と私

埼玉県大井町 石田 七重

成道会に参加させて頂きました折に、ご老師から「歳末助け合い運動」についてのお話がありました。例年、御老師自ら柏駅に長時間立たれる、とお言葉を、心の中で合掌しつつ拝聴いたしました。

実は、毎年師走になり、ラジオ、テレビ、街頭で耳にする「歳末助け合い運動」という言葉には、子供の頃の忘れられない思い出があります。

戦後四、五年でしたか、小学校低学年の私は、ラジオから聞こえてくる「歳末助け合い運動」に協力下さい。NHK」といった言葉の内容を母に尋ねました。母は私の子供であつた為か、戦争で父母を亡くした孤児の事などを話し、貴女も子供として何か出来る事がある、どんな小さな事でも多くの人の心が集まれば、淋しい孤児にいくらかでもお役に立つ、といった話をしました。当時、お金とか、お小遣いとかにあまり縁なく暮らしていた子供でした。東京大空襲ですべてが焼けて、久しく玩具らしきものもないこの暮には、クリスマスプレゼントに、念願の大きな箱入りの、お鍋やフライパン、

食器のママゴト道具を注文してあり、クリスマスに少し早い頃、手に入れたばかりでした。

数日考えた末、私は決心し、「これを持ってNHKへゆく」と。母は黙って私の手を引いて、たった一箱の真新しいママゴト道具を持って、当時内幸町にあつたNHKの「歳末助け合い係」へ行きました。先方とどんな会話を母がしたかは全く覚えていませんが、後から少しえらそうな方が出ていらして、ニコニコと受け取って下さり、私はとっても晴々とした気分です。と帰宅したのを覚えています。

後年、毎年暮になり「歳末助け合い運動」という言葉を耳にすると、あの時の母の行動が想い出されます。又私にとって大変な宝のママゴト道具の行方も気になります。同時に受け取って下さったNHKのおじさんは、随分お困りだっただろう事も。そして周囲の大人達の配慮の深さ、温かい思いやりが想い出されます。周りの大人を困らせた数々の苦い想い出の一つ、「歳末助け合い運動」に、今はもちろん誠にささやかながら、お金を箱に入れさせて頂いています。

成道会の折に

境内の公孫樹大樹の黄葉の黄ひと色を両手に集む
釈迦牟尼の悟りのありて仏教は伝はり広まる今日成道会
肅々と散華舞曲が始まりし成道会に列し心経唱和す
御老師の拈香法語に導かれ五体投地を行ず成道会
法話聞き迷ひの一つ解けゆきぬ背筋のばして家路を急ぐ

観音さまと私

柏市 高野千代子

戦前の昭和一四、五年の頃のことです。私共の一家は浅草の鳥越に住んでいました。父は仕事の都合で、月の内半分は出張で家を留守にしており、母は私を頭に二人の弟の三人の子供を、親鳥が羽の下に抱えるようにして留守を守っていました。その頃の母は、私達三人の子供を連れて浅草の観音さま詣でによく出かけました。何で観音さま詣でなのか、つい聞くこともなく過ぎてしまいました。その日が来ると朝から嬉しく待っていたのを覚えております。

鳥越から蔵前に出て、浅草観音まで歩いて小一時間かかりました。まだ映画館全盛時代で、浅草の六区は大変賑っていました。お参りを終ると、六区のはずれに「びつくり天井」という食堂があり、その食堂で食事することが定番のコースでした。井の中には大きな

海老が二本、井からはみ出して乗っており、代金は当時のお金で二十銭だったとすっかり覚えております。そのおいしかったこと。食べ盛りの子供達にとつて観音さまに詣でる日は、その「びつくり天井」を食べさせてもらえることに大きな期待があり、観音さまは、二の次、三の次で連れていってもらったものです。

それが観音さまと、私との最初の出会いでした。

その後戦火に追われて、私共は昭和二〇年三月、山梨県に疎開しました。一九歳で終戦を迎えた私は、食糧の買い出しに翻弄され、生きることに追われた青春で、観音さまとは無縁となりました。

そして昭和三七年、上京して東京にまい戻ってきました。そこで私の仕事場となった所が、なんと、浅草寺の境内の地続きくらいの距

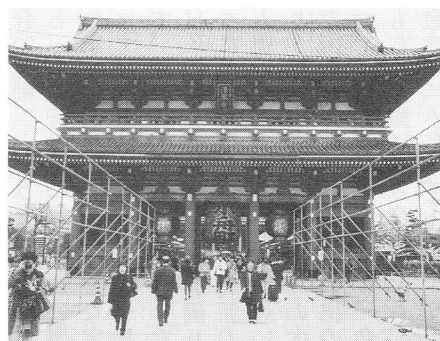
離にあつて、行きに帰りに浅草観音さまの境内を通り、東武線の乗り場を往復したものでした。

映画館は、テレビの全盛で全くすたれ、「びつくり天井」も跡形もありませんでした。今思いますが私が三〇余年仕事をさせていた中で、一番心の安らぎと、人間関係の幸せをいただいた勤務場所がここであつたように思います。

その後、いくつかの部署を巡り、昭和五八年退職しました。その年、友人と奈良の長谷寺に詣で、その地で聖観音像をいただく縁に恵まれました。今、私の持仏としてお厨子の中にお祀りしてあります。その同じ年に今は亡き高間さんのご縁で、龍泉院の参禅会に参らしていたくようになりました。

そこには何と、観音堂があり、百観音さまがお祀りされているではありませんか。今この文章をしたためながら、何と随所に観音さまが現れ、気づきやお導きをいただいたことか、改めて観自在の観音さまに合掌させていただきます。

龍泉院の観音堂に、相田みつをさんの書である「観音さまがみている ほとけさまがみている、みんなみている、ちゃんとみている」がお飾りされております。きつと相田さんも、観音さま、ほとけさ



今も賑わう浅草寺

まにいつも見つめられているのを、体で感じられたお一人だったのではないかと思っております。ちゃんと見ていて下さることを信じて、生きることへの強い想いが、相田さんの記すさまじき言葉の中に、キラリと光る根っ子としてあることが判りました。

どうもがいても、だめなときがある

ただ、手を合わせる以外に方法がないときがある

ほんとうの眼が、ひらくときはそのときだ

なむ観音さま、わたしにちからがありません

どうか手伝って下さい
南無観音さま

みつを

澤木興道『禪談』に学ぶ

柏市 五十嵐嗣郎

本堂での二炷の参禅が済み、ご老師からの『正法眼蔵』ご提唱が始まるまでの間、何か面白い本がないかと廊下の本棚を眺めていると、澤木興道老師の『禪談』というタイトルの古本が眼に入ってきました。奥付を見ると昭和三〇年代に刊行されているから、ご老師がお若い時に読まれたのでしょうか。ご老師がお若い時に読まれた本ならば、さぞかし難解だろうと覚悟して読み始めましたが、これが実に平易な語り口で書かれており、非常にわかり易いのは驚きでした。

また書かれている事柄は、一語一句が全て心に響いて来るので、グングン引き込まれていきます。澤木老師が『禪談』で述べられている内容と、椎名老師が毎月の参禅会でご提唱される事とが、本質的な所で一致しているので、面白いことに、親しい和尚さんからお説教を聞いているような気持ちになってきます。

『禪談』は発刊当時ベストセラーだったようで、小畑さんなどは

よくご存知の本ですが、私はこんな素晴らしい古書は誰もまだ知らないだろうと思い、茶話会の時に得々と披露したのですから、今から思えば大変恥ずかしい次第です。さらに調子に乗って感想文を書きますと迷言しながら、その後忘れてしまい、武田さんから督促のお電話を受けて、慌てて駄文を書き始めたところです。

全体は一三章あり、どの章も非常に面白く、しかもウムと納得するものばかりですが、その中からひとつ身に染みたものを選んでご紹介します。

「少欲と知足」の章に徹堂和尚の蛇の頭事件があります。これは典座の徹堂さんが気づかない内に、おっかない師匠の風外和尚の腕の中に、蛇の頭が入ってしまったのです。さあ大変、物凄く怒鳴られるところですが、徹堂さんこの大事件をものの見事に解決してみせるのです。それは実に鮮やかな解決策です。如何にこの難関を潜り抜けたかは、皆さん『禪談』をお読み下さい。

徹堂和尚が難関を解決した素晴らしい知恵は「何事も仕事になりきる、自己になりきる」ことにより、即処是道場の活きたはたらきから生まれる」と澤木老師は述べられています。

即ち、徹堂さんは典座の役になりきっていたので、絶妙な知恵が生まれてきたのです。

我々はふだん仕事に行き詰まると、何かよい知恵がないかと、あちこちの人に相談したりします。先輩や専門家の意見を伺うのも良いけれども、まずは自分が仕事になりきることです。仕事になりきれば、解決策は自ずから（仏さんの方から）出て来ると信ずることです。バタバタしないです仕事・自己になりきることが肝要なのです。

澤木老師の舌鋒は鋭く、社会を射る目は厳しいものがありますが、『禪談』を通じて最も伝えたかったことは、「自分というものを一生の中で見出さなくてはならない。そのために修行があり、ご飯を食べ、一日も欠かさず、自分を磨か

なければならぬ」ということではないかと思えます。

この原稿を書くために、最近発行された改定新版『禪談』を再読していますが、二、三ヶ月前に読んだことをすべて忘れていたのです。読んだときの感動は残っているのですが、内容はきれいに忘れ去っていることに大変ショックを受けました。

良書は何度も繰り返し読まなければならぬと言われますが、これは「読書後の感動の大きさほど、内容は記憶に残らない」と思ったのですが如何でしょうか。それとも単に記憶力が低下したためなのでしょう。

いずれにしろ最高の書はやはり仏祖の説かれた経典です。だから毎日読まなければなりません。毎日の読経により少しずつ内容が記憶に蓄積されていくのです。

そう、出張でこの三日間修証義をお唱えしていない。また道元禅師のお示しが体から消えて行く。大変大変。

功德多大な年番幹事

私にとり、昨年一年間は、アッ

という間に過ぎた年でした。

柏市 加藤 孝

小畑さんから年番幹事をやらな
いかというお話を受けた時、相手
が違うのではないかと思いました。
と、申しますのは、坐禅会に参加
させて戴き半年も経たず、会の方々
のお名前やお顔も判らない、また、
もっと相應しい方がたくさん居る
のにと考えた次第です。

そのような私の不安を咄嗟に察
してか、小畑さんは「私や杉浦さ
んが助けますから大丈夫ですよ」
と仰せられました。その後、私の
心配は杞憂と終わりました。

人間、三人集まれば社会をつく
り、そこに階層が出来るといわれ
ます。つまり、ボスを頂点とした
組織が意図するかしないかに関わ
らず発生するのでしよう。

私の心の遍歴の過程で、色々な
坐禅会に参加させて戴いてしまし
たが、心身の絶対的自由を追求す
るはずの会にさえも、一般社会の
ようなヒエラルキー（階層）が存
在していました。そして、そのボ
スが尊敬に値する人ならば一步譲
って容認できるのですが、精神的
なリーダーと一般社会のリーダー
とは違います（本当に禅を極めた
人ならば、精神社会でも一般社会
でもリーダーたり得るでしょう）。
そのような坐禅会にはどうしても
馴染めず、遍歴を重ねてきたわけ

です。

ところが、龍泉院参禅会は全く
自由な会でありました。ただ、自
由とは言いがたにも御老師をはじ
め、小畑さんや安本さん、また杉
浦さんを中心に、一本芯の通った
よそでは見ることの出来ない素晴
らしい会であることを実感いたし
ました。

これも、それぞれの社会的立場
をいっさい会に持ち込まず、ただ
各人が禅修行に励む場であるとい
う暗黙の了解があるものと考えら
れます。

さて、年番幹事の話に戻します
と、六月には突然、宮内さんが幹
事を辞退されましたが、何とか一
年お役を全うできましたのは、御
老師や小畑さんをはじめとした諸
先輩の御指導の賜物であると感謝
をいたしております。

ところで、御老師からは（ため
禅）の戒めを説かれますが、年番
幹事をやらせて戴いた（ため）、そ
の功德は多大なものがありません。
まず、一年間皆勤したことです。
本来怠け性の私が一度も休まなか
ったということは、奇跡的なこと
であります。休むことにより皆さ
んへの御迷惑を考えると、万障繰
り合せて、生活の全てを坐禅会
の日に照準を合わせざるを得ない

こと、そして、それに集中すれば
何とか可能となることを実体験出
来たことは、大きな自信となりま
した。

次は、年番幹事の立場でなけれ
ばお近づきになれなかった訳です
が、新参者の私でも僅かな時間で
たくさんの方々より親しくお付
き合いますきつかけ作りが出来た
ことであります。

そして更に有り難かったことは、
参禅会の指導者（御老師は特別高
いところにおられます）である小
畑さんに、無私の指導者とはどの
ように行動するべきかということ
を教えて戴いたことであります。
これは、これからの私にとっては
何にも増して大きな功德となると
思います。本当に有り難うござい
ました。

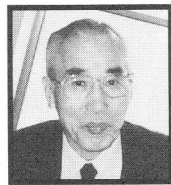
まだまだ戴いた功德は数多くあ
りますが、とりあえずこれまでに
しておきます。

一年間私のような至らない者に
大切なお役を任せて戴いた御老師
や先輩会員の皆様に感謝するとと
もに、不十分な部分につきまして
は、この場をお借りしてお詫びい
たします。また、今年の年番幹事
の方々には、御苦労さまと心から
申し上げます。

―物故会員追悼法要―

昨年一〇月一九日、龍泉院にて
参禅会物故者の追悼法要が営まれ
ました。当参禅会は開設以来二六
年の歳月を経て、上山者も増加し
毎月の定例参禅では三〇名を越え
ることもあります。しかし長年に
渉り参禅された方で、病や高齢
の為に亡くなられた方が、この度
三名を数えるに至り、会員の発案
によって追悼法要の運びとなりま
した。長老だった高間利介氏、神
戸正氏、富田文子氏の法要にはご
遺族のご列席をいただき、偲ぶ会
ではありし日の思い出話が披露さ
れました。また故人と面識のない
近年の参禅者も数多く参加されて
心のこもった供養となりました。





ご挨拶

政安裕良

皆さんご多忙中にも関わらず私の為に、通夜並びに告別式にご参集賜り篤くお礼申し上げます。

私は皆様ご承知の通り、平常、健康には必要以上に留意し、先手先手と各種検査を受けて来た訳で、ご座居ますが、平成六年に実施の胆道閉鎖症については、過去に何回か超音波検査や、CT、ERCPの検査等を受けて来たにも関わらず、結局、黄疸が発生し、総胆管癌の手術をされる迄の間は、原因を判明する事が出来ませんでした。

手術後はある程度の体力の回復を見る事が出来ましたが、平成八年七月、同年十二月、更に平成九年三月、同年七月の四度に亘り急性膵炎にて入院し、その都度体力を消耗し、如何とも致し方ない状況でご座居しました。

其の原因としては、特段無理をした訳でもなく、結局膵頭十二指腸切除手術の予後の経過不良だった様でご座居します。食べると膵炎、食べねば衰弱と、孝ならんとすれば忠ならずで、家内にも随分食事

の点で要らぬ心配をかけたものでご座居ます。

また手術後の当初は、抗癌剤も服用致しましたが、其の当時、経口抗癌剤は消化器系統には効果無しと云う事が有力紙に掲載されましたし、実際に経口剤を服用しますと脈の乱れも出て参りますので、覚悟をきめて、途中から服用しませんでした。

従って平成九年の六月に、余命三ヶ月との告知を受けた際には主治医に、当初から抗癌剤を使用していればもっと延命効果が有ったのと言われましたが、是れも自分で決めた道ですし、来るものが来たと云う気持ちでご座居しました。今色々考えますと、全てが何かの因縁と存じておりますし、漢方、その他幾多の民間療法もやってみましたが、何れも癌という強敵を駆逐出来る存在ではありませんでした。

今後の医学の進展を期待するのみでご座居します。

生を受けてより七三年間、つねにご恩顧を賜りました多くの皆様方に対して、最後のお礼を申し上げます。職を離れてから、健康な余裕ある時期を持つことも無く、今此の時期に死んでいく事は至極残念で

はありますが、これも何かの因縁と観念致しております。

死後の世界がどの様なものであるかは存じませんが、恐らく何も無いことでしょう。

然しこの数年間、本日ご導師をお願い致しました、曹洞宗、龍泉院の椎名老師様等のご指導により、日頃参禅生活に入らして頂きました結果か、嘗て想像しておりました程の絶望感も悲しみもなく、比較的平穏な気持ちで、何処か天空の故郷に帰る様な気持ちでおります。

一時平成八年十一月頃には体調すこぶる優れず、

死の恐怖骨髓の中に蟠踞して眼は眠けれど心寝むらず

という心境の時もご座居しましたが、現在は冷静に無上の世界に消えていける様でご座居します。

皆様ご多忙の中本当に有り難うござ座居しました。

最後に皆様方の末永いご多幸を草葉の陰とやらから、祈っております。

七三年一期の夢

思ひは天空の無上に参じ
身は宇宙の塵埃と化す

魂魄尚存すれば妻子を護らむ

平成九年十二月

以上

在家の遺偈

松戸市 小畑 節朗

一二月、幽冥を隔てて故政安さんから御挨拶を頂いた。昨年六月にNHKで放映された内山興正老師のVTRを差し上げた時の御返事が生前の最後のお便りとなつてしまった。

その時も我が思いを淡々と、又切々と綴られていて、かえって返信することが出来なかった。今更にお許しを願う気持ち一杯です。

古来禅僧は遺偈を必須とされてきたが、斯道に徹しなければ受ける者は感得できない。

政安さんのこの「ご挨拶」は在家の遺偈ではなからうか。

自己を習うの深まりと自己へのたゆまない観照がこれをなさしめた。死に臨んで死後の有縁の人々への思いやりと生死の事如何の問いは重い。私は挽詩一片を胸中に温容に香を献じてお別れをした。

知己相逢千古意 耕雲多歳一心平
晚来何耐窮陰雨 君去独聞飛霰声

知己相い逢うは千古の意

耕雲多歳にして一心平かならん
晚来って何んぞ耐えん窮陰の雨
君去って独り聞く飛霰の声

合掌

龍泉院参禅会簡介

一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）

一、坐禅 止静 鐘 三声 坐禅

経行 鐘 二声 経行

放禅 鐘 一声 放禅

一、講義 木版三通 開経偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を聞く。

講師 龍泉院住職 椎名宏雄老師

平成九年一月より「發無上心^{ほつむじょうしん}」の巻を提唱

一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談

正午解散

一、参加資格 年齢、性別を問わずどなたでも参加できます。

一、会費 無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二日曜。（本年は一二月六日）

釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雜記

参禅会記録（）中は座談の司会者
平成九年

●一〇月一九日

参禅会物故者追悼法要

●一〇月二六日 二四名
会員二三名、御遺族六名

●十一月二三日 三一名
（三町 勲氏）

●十二月七日 二七名
（小畑 節朗氏）

第一五回成道会 二七名

導師 椎名宏雄老師

総幹事 小畑 節朗氏

●十二月二八日 二九名
（井之輪 進氏）

龍泉院スス払い

平成一〇年

●一月二五日 二六名
（杉浦上太郎氏）

●二月八日 一五名
新年会

●二月二二日 二八名
於・柏駅前芳野屋

●三月二二日 二九名
（八木下真司氏）

●三月二二日 二九名
（武田 博志氏）

▼椎名老師のご報告。一昨年ご講演頂いた板橋興宗老師が、四月九日総持寺の紫雲台観下にご就任。

▼頂戴した板橋禪師のカレンダー

をめくると、その言葉と絵が凛と響いてくる。二月（日本ノ神髓ハ簡素ニアリ）三月（裸で生れて来たになに不足？）四月（握っているかぎり新しいものはつかめない）執着を捨てて、まっさらな心で毎月のご提唱を聴きたい。

▼膝関節症で坐ることが出来ない。ご老師の温かいご配慮で椅子が用意され深謝。椅子禅の同友が現れると心強いけど。

▼最近読んだ青山俊董尼の本より（病もまた善知識）という言葉に胸に刻む。（吾亦紅）

▼成道会の前日、椎名老師は街頭で歳末助け合いの托鉢をされた。石田さんは翌日、老師のその話に触発されて寄稿された。世の中、喜捨の心が失われてゆく。

▼少年犯罪が多発している。新聞紙面はその分析に連日かまびすしい。物の氾濫、金銭感覚のマヒ、学校や社会を批判する前に、親として、社会人の先輩として自らの姿や態度を見つめ直してみたい。決して他人事ではない。

▼今年度の年番幹事は寺田健二氏、加藤誠一氏。どうぞよろしく。

▼年番幹事の役目を前任者の加藤孝氏に書いて頂いた。自らを律し一年間休まず参禅され、それを功德と言うのは素晴らしい。（佇泉）

●発行／天徳山龍泉院 千葉県沼南町泉81
●印刷／岡田印刷株式会社 柏市高田1116-45
●電話 0471(91)1609
●FAX 0471(43)3131